

兵庫の女

武田 繁太郎
え・松岡 寛一



☆あらすじ

広島在の貧農に生まれた藤井まつをは、十五才で故郷をとびだすと、神戸にてで鐘紡の見習女工になった。明治三十一年の春である。

働き者で要領のいい彼女は、わずかのまに本女工になるが、やがて、同じ職場の安福利市と結婚した。利市はまじめでおとなしい青年だが、腕のいいバンドルの熟練工だった。

二人は鐘紡の社宅に住み、共稼ぎをはじめ。まつをははできるだけ家計をきりつめ、夜の目も寝ずにマツチの箱貼りの内職に励んだ。

第四章

利市は、妻の鋭い視線をまぶしそうにはずしながら、会社で藤田に言われた話を語ってきかせた。

「いや、わしもな、さいしょはなにを言っただのか、わけがわからんさかい、そんな金魚池みたいなもん、うちにはあらへん、と答えたんや」

「ふん。ほんなら？」

「そらおかしい、と藤田はんは言うんや。そんなはずはなからう、それが証拠に、おまえの弁当の菜みてみい、いつみても、金魚の刺身ばかりやないか、ようつづくなア、そう言うて、藤田はん、笑うんや」

利市も、自分でもちからのない笑い声をたてた。

なるほど、利市の弁当の中身は、毎日紅生姜の輪切り

一品にきまっていた。それを、藤田は、金魚になぞえて利市をからかっていたのであらう。

むろん、藤田にしてみれば、当の利市よりも、むしろつましさをとりこして、吝嗇とうわさされているまつをへの当てつけの意味もこめていたにちがいない。

だが、まつをは、そんな良人の同僚の椰揄など、すぐさま跳ねかえすように、

「ふん。阿呆らしい。ひとがなにを食べていようと、大きなお世話やないか」

と、鼻のさきでせせら笑った。

「藤田はんも、他人の疝氣を頭痛に病むひまがあったら、ちっとは自分の嫁はんのことも心配したらどうや」

「嫁はんがごないしたんや？」

「どないしたんも、こないしたんもないわ。そら、藤田はんはバンドルのええ顔で、稼ぎもいばんやろかいな。けど、なんぼ稼いだかて、あんな自堕落な嫁はんと連れそうてるかぎり、男は一生、あたまたがるか。いつまでたっても、社宅ぐらしの職工や」

「なにもおまえ、そうむきにならんかて。冗談話やないか。藤田はんも悪気があって言うたわけでもないし……」

「いいや。むきになってるとちがいます。あんたはよう知らんかも知らんけど、あの嫁はんは、お喋りで、てんやもん食いで、朝から晩まで、子供の尻をなでながら、社宅じゅうをあそびまわつとう」

「はオ。そんな嫁はんかア？」

「そうや。亭主は勤めにでて、なんにも知らへんけど。そら、だれかって、食べたもん食べ、寝たいときに寝て、それで出世できるもんなら、この世に苦勞するもんはおらんわ。あんた、そない思いまへんか」

「うむ——」

「ふん。ひとの弁当のおかずを笑うてる藤田はんが、どうなつていくか、ようみとつたらわかる。あたしは、い

まにきつと、あんな連中をみかえしてやるわいな！」

まつをは吐き捨てるように言うと、茶碗の白湯をがぶりと飲みほし、そのまま、マッチの箱貼りの仕事部屋にしている三帖間へたつていった。

「ちよつと、油が勿体ないさかい。まだ起きてるんやつたら、そっちのランプ消して、こちへきとう」

呆然と妻の後ろ姿をみおくらっている利市の耳に、やがて、そんな声がキンキンとひびいてきた。

いまにみかえしてやる——と、確信ありげに良人に言いきつたまつをは、いったいどんな目論見を抱いていたのか。

それから丸三年、まつをは、夜を日について、死にもぐるいに働きとおしていった。

大陸では、また、新しい戦争がはじまっていた。黄海蔚山沖海戦、遼東占領、沙河会戦、旅順艦隊の全滅——そんな威勢のいい戦況がつたわるたびに、号外の鈴の音が、狭い社宅の路地をけたたましく鳴りひびいていった。

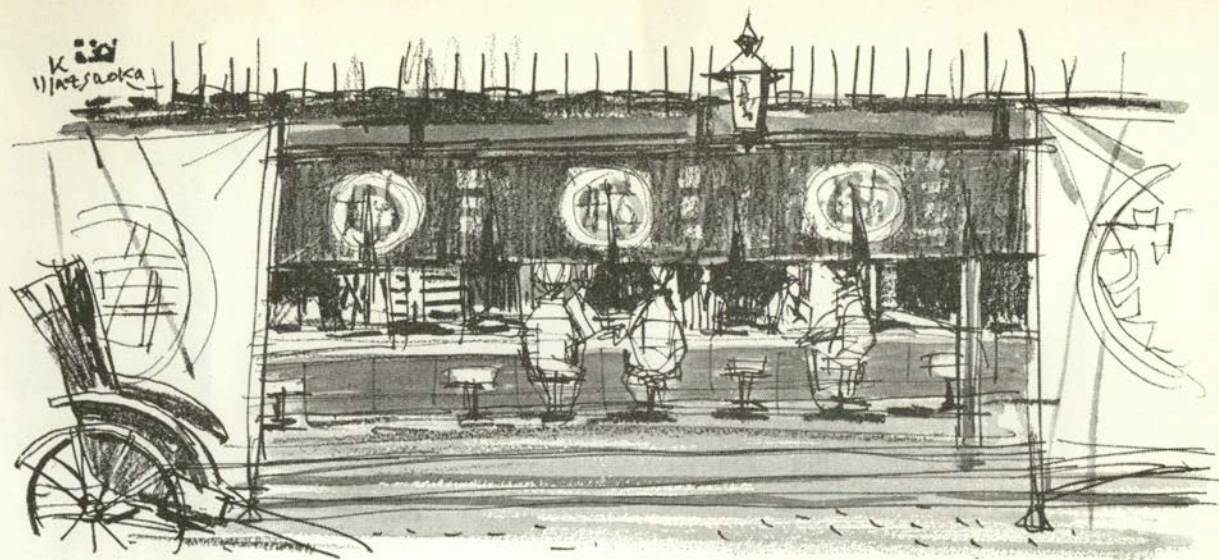
神戸の港からは、召集の兵隊たちが、軍馬や大砲などといっしょに、貨物のように軍用船につみこまれては、つぎつぎと大陸の戦場へおくりこまれていく。

鐘紡の職工たちにも、連日のように赤紙が舞いこみ、歓呼の声におくられながら、故郷の原隊へむかっていた。第二乙種だった利市にも、足どめ令状がきた。

だが、この戦争の軍需景気が、鐘紡などの紡績工場をさらに大きく膨張させたのはいうまでもなかった。

ちょうど十年まえの日清戦争以来、綿業を主力に成長していったこの国の産業は、四千八百万人の国内市場をはみだし、朝鮮から北清、満州へと、新しい国外市場の獲得に狂奔していた。

日本と清国との武力衝突が、両国の朝鮮市場の争奪にその原因の一半があったのだとすれば、こんどの日露戦争もまた、ようやく世界的な規模にまでたかまりかけて



いた日本の産業と、帝政ロシアの強力な東進との衝突に基因していた、といえたかも知れない。

事実、清国むけ綿製品の五、六割までが、露国とことをかまえた北清にむけられていたのである。

しかし、まつをには、もとよりそうした戦争の誘因など、つゆはともわかつていようはずがない。

ただ、彼女の目には、自分が働いている鐘紡のすさまじい発展ふりと、そして、その発展につれて、いままでもったくの未開地だったこの兵庫の町が、日に日にひらけていくさまだけが、わくわくするように映じていたのである。

鐘紡は、工員の数だけでも、すでに数千をかぞえるほどにふえていた。

ひとり鐘紡だけではない。三菱とか川崎とかいった重工業の工場も、あいついでこの和田岬一带に進出し、兵庫の町そのままが一大工業地帯に変貌しようとしていたのである。

むろん、工場がふえれば、人間もふえる。人間がふえれば、彼ら相手の商店もふえる。その社宅や職工街、商店街が東尻池から吉田新田、遠矢の浜、御崎本町筋にかけて、ぞくぞくと軒をつらねはじめていった。

まつをの三年間の汗と脂の結晶が、ちょうど二百円になっていた。

新しい年を迎えた早々、難攻不落だった旅順が陥落し、やがて、三月、奏天会戦の大勝利が報ぜられてから、しばらくたったある休みの日であった。

まつをは、めずらしくマッチ箱貼りの内職をやすむと、利市には無断で、虎の子の二百円をしっかりと懐中にして、吉田町の社宅をでた。

彼女は、笠松七丁目の通りから、踏切りをわたって、御崎本町筋を真ッ直北にむかっていた。第五橋の運河から吹きあげてくるとど臭い潮風が、すでに、なままたたかい春の気配をただよわせている。

★神戸の催物ごあんない★

▷五十嵐喜芳リサイタル

5月16～19日 PM6:30 16日のみ7:00 主催/芳音 会費¥450 演奏/中沢寿士とMBSジャズオーケストラ 於国際会館

▷パーシー・フェイス管弦楽団神戸公演

5月22日 PM6:30 主催/神戸新聞会館 入場料 S=¥2000 A=¥1800 B=¥1500 C=¥1300 D=¥1000 E=¥860 於国際会館

▷劇団四季公演 "オンディーヌ"

5月23～24日 PM6:00 入場料 S=¥1200 A=¥1000 B=¥800 C=¥600 D=¥400 作/ジャン・ジロドゥ 演出/浅利慶太 出演/北大路欣也。加賀まり子ほか 於国際会館

▷ポリシヨイバレー神戸公演

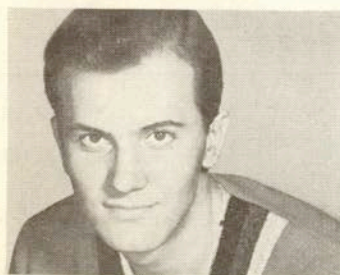
5月25日 PM6:20 入場料 S=¥2500 A=¥2000 B=¥1600 C=¥1200 D=¥800 於国際会館

▷ヨゼフ・スークヴァイオリニリサイタル

5月27日 PM6:30 主催/芳音 会費 ¥450 於国際会館

▷俳優座公演 "ひげのはえた制服"

5月28～30日 PM6:30 主催/芳音 会費 ¥450



★パット・ブーン

▷神戸五大学交歓合唱音楽会

6月3日 PM6:30 出演/神戸医大・神戸大・神戸外大・神戸商大・甲南大学各グリークラブ 入場料 ¥200 於国際会館

▷パット・ブーン神戸公演

6月6日 PM6:30 主催/神戸新聞会館 入場料 S=¥2000 A=¥1600 B=¥1200 C=¥900 D=¥700 於国際会館

▷シル・オースチン楽団神戸公演

6月14日 PM6:30 主催/神戸新聞会館 入場料 S=¥1500 A=¥1200 B=¥1000 C=¥500 於国際会館

▷野村狂言の会

6月28日 PM6:30 主催/神戸市 入場料 A=¥600 B=¥400 出演/野村万作・野村又三郎・野村万之丞 於国際会館

まつをは、小柄なからだをしゃんと延ばし、大きく胸を張って、足早に歩んでいた。
清盛塚の角から、大仏前、西宮内、本町をとりぬけた。
「ほオ。ここはにぎやかな町になるなア」
急ピッチで埋立てのすすんでいる湊川土手を歩みながら、まつをは、懐中にした虎の子の二百円を、着物のうえから、もう一度しっかりとたしかめてみた。
湊川のやや上流、こんびら橋をわたったすぐちかくに七福町があった。その七福町が高い土手のあたりでつきようとする一角に、平梅呉服店という三階建ての大きな呉服問屋がそびえている。
まつをは、胸をときめかせながら、その店のまえに立った。
間口は、五間以上もあるうか。広い店先きには、丸に梅の字を染めぬいた暖簾がいつぱいかかっている、たえまなく客たちが出入りしていた。
「ああ、やっぱり、ここやなア。大きなお店や」
まつをは、しばらくわれを忘れたように、店のたたずまいに見はれていったが、やがて、つかつかと紺暖簾をくぐって、店内にはいつていった。

藤畳を敷きつめた店の間では、幾人もの番頭たちが、反物の山にうずまるようにして、来客たちに応対していた。
だれもが、いそがしそうであった。活気にみちた店内では、だれひとり、まつをはがいつてきたことに注意を払うものはいなかった。
だが、まつをはのほうも、意に介さなかった。店の土間に立ったまま、
「大將、おいでですか」
と、だれにともなく、大声で呼ばわった。
店内の空気を突きとおすような、その突拍子もない声に、だれもおどろいて、声の主に視線をあつめた。
みれば、洗いざらしのボチがすりをきた、まだはたちにも間がありそうな、およそこの店には似つかわしからぬ小娘である。
番頭のひとりうさくさそうにまつをはの姿をながめながら、
「大將はいやはるけど、なんぞ、用か」
と、つつけんとんにたずねた。

△次号につづく▽

＊カメラ・ルポ
カナディアン・アカデミー
創立五十周年に
松下体育館の
竣工

カメラ・緒方しげを



カナディアン・アカデミーは神戸の長峰山にある。大正二年に阪神地方に住むカナタ・メソジストミッションが主体で設立された外人学校。ちょうど今年で五十周年を迎えた。

創立当時は全寮制。生徒十六名という小さな学校だったが、現在は一年生・十二年生まで英・米・仏をはじめ二十五カ国の学生が、ギルバート・E. パスカム校長のもとに人間味あふれる教育をうけている。

前の理事長オーティス・ケリー氏が五十周年記念に体育館の設立を考え、前校長から相談されて寄附をつつたがはかばかしくない。設計にあたった竹中鍾一氏(竹中工務店社長)が、かねて仲介役となり松下幸之助氏(松下電器会長)に頼んだところ、国際親善に役立てばとポンと五千万円の寄附をうけ、「松下体育館」の誕生をみることになったわけである。





MATUSTITA GYMNASIUM

正面入口の文字が
眼に入る。

あいにく当日は、
松下幸之助氏は風邪
ひきで欠席。しかし
式典は万国旗が飾ら
れた会場に二百人の
在特外人が集まって
おめでとう！と喜び
あった。

2階メイン・フロ
ーアには28メートル
の標準バスケット・
コートが一面あり、
練習用なら二試合、
バレーボールなら三
試合、バドミントン
なら六試合を同時
に行える。愉快だっ
たのは在校生の体育
実技で、日本の運動
会形式を想像してい
たものには驚きであ
る。
小学生がこちらの
コーナーではスクエ
ア・ダンスの輪をく
み踊れば、あちらで
は高校生がバドミ
ントンをする。先生
がその中に入って試
合をすると、ビー
ィッといと生徒が
口笛が飛ぶ。真中
では障害物競争で綱



ぐりてひっくり返つ
ている男の子もいる。

赤、青、グリーン
黄色のきれいなユニ
ホームが、いつもの
授業時間そのままの
ふんいきで、のびの
びと、自由に飛びは
ね踊っている。

見ていて大変楽し
いのである。

行進曲とともに入
場して統制のとれた
演技を見せることに
重きをおく日本の運
動会が対照的に感じ
られる。

その後、日本一の
武庫川女子大体操チ
ームと、暮合、神港
各高校チームが体操
と柔道を披露した。

これからは国際親
善のために日本チー
ムと試合したり、学
校が休みのときには
神戸市民にもつかっ
てもらおうという。

コスモポリタンな
町に、のびやかな風
が長峰山から吹き降
りてくるようである。





銘店抄その19

陳舜臣（作家）

ユーハイム・コンフェクト

三宮生田祐

北欧銘菓の調い文句であるが、西社長は戦前NYKからドイツのハンブルグに派遣され、そこで製菓の修業をしたのだから、ドイツ菓子がこの店の大黒柱となっている。ただし、ドイツ人と日本人とは味にかんずる嗜好もちがうやはり日本人のデリケートな舌にアレンジする必要があるユーハイム・コンフェクト戦後二十年の努力は、もつぱらこの点に結集された。堂々たる偉容を誇る熊内の本社工場はその成果というべきであろう。ピラミッドケーキとも呼ばれたパウムクーヘンは、とくにこの店の十八番である。こことさら気取った狭い高級層のみを狙わず、堅実ではばのひろい中間層をマトにえらんだのも、成功の一因であったにちがいない。

洋菓子の生命はそのかおりにあるが、それも香料をぶっかけるというのは古いやり方という。舌にのつたときのえもいわれぬかおりは、ブランデーやラムなど舶載の洋酒がつくりだす。そんな話をきけば、土戸のわれわれでもツバをのみこんで、ケーキなるものを見直さねばならぬような気がする。

（写真左筆者・右は西義弘社長）



銘店抄その20

陳舜臣（作）

淡洲堂

センター街山側

淡洲堂は瀬戸物やガラス器を扱う店である。茶碗や皿のあいだを通り抜け、絨毯を敷きつめた階段をトントンと二階へあがると、そこに茶室がある。そこに茶室の存在によって、淡洲堂が月なみな茶碗屋でないことがわかるだろう。かといって、「趣味の店」というたぐいの少女趣味の店でもない。茶室には凝縮されたなものがある。この店はクリスタルガラスのようにあかるく、そしてあたたかな雰囲気をもっている反面、どこことなく人の心をひきしめるふしぎな力をひめている。

著名な陶芸家の作品展が、ときどきこの二階でひらかれ、それに書展が加わることもある。陶磁のもつ深い味わいや造型美が、心ある人の鑑賞を待っているのだ。

店頭にならんだこまごました品物も、なんとなく興行きがあるように思えるのは故なしとしない。店主の藤原さんが茶室でしずかに茶を立てているすがたをみると、品物の吟味という点にかんしては、顧客は全幅の信頼を寄せてまちがいないと安心するのである。

（写真左藤原有社長右から筆者、半田忠氏・出口華露氏）

Hino

高性能の日野

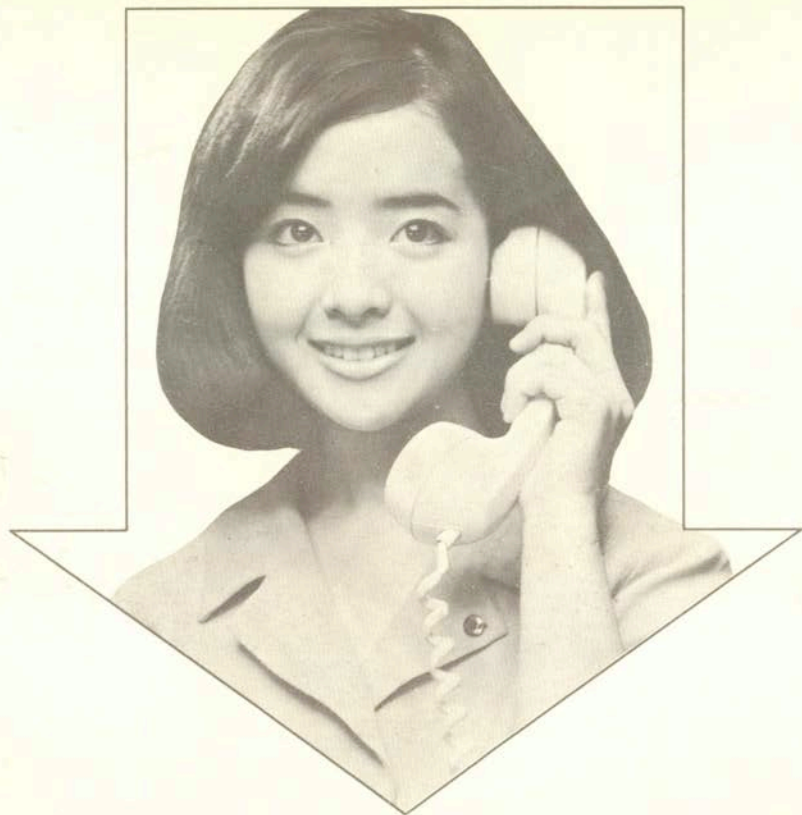


日野
ゴンテッサ 1300

兵庫日野自動車株式会社

TEL <34> 7651大代表

東宝 内藤洋子



はい●あなたの
銀行です

 神戸銀行

■ 百店会でのお買物は神戸銀行のホーム・チェックをご利用ください。

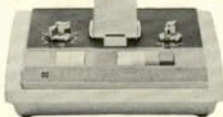
電化ひとすじ技術のナショナル

神戸市東灘区八幡通57933
TEL. 078-37037
ナショナル

Q 羽根で風量がゲンと大きく！
循環給油装置でなめらかな回転！
自由首振りで風が思いの方向に！
前面ワンタッチで操作はすべてOK！

風がゲンと大きくなった
松風

30cm高級お座敷扇(F-30MR)
O羽根・自由首振り・
前面電圧調節・
前面首振り角度調節・
ピアノスイッチ・60分タイマー・
プッシュアップ・コード収納・
リモコンコンセント
月賦定価(6回) 16,400円
現金正価 15,600円



独創の〈自由首振り〉装置つき

- Quantity 〈ゆたかな風〉
- Quiet 〈しずかな風〉
- Quick 〈はやくとどく風〉
- Quality 〈品質のよさ〉

昭和四十年一月二十日 発行所／神戸市東灘区御幸通八丁目九ノ一 神戸国際会館一階 TEL. 078-37037 頒価一〇〇円
第三種郵便物認可 昭和四十一年五月十五日 発行 毎月一回 大日本印刷株式会社印刷 編集発行／小泉康夫 (送料12円)



松下電器 ナショナル 扇風機

羽根